

平成艸紙



おりおりの記

京都・ニューデリー・北京・東京

野村資本市場研究所
理事長

渡部 賢一

数ヶ月前に大徳寺如意庵を訪れる機会を得た。40年ほど前に故立花大亀老師が再建された塔頭である。ハイカラ好きだったからとの説明があったものの、その本堂の窓はステンドグラス、床はブルーのタイル張り、天蓋がドイツ製ガラス。提唱なども行う椅子は中国から、拝席はイスラム教徒のペルシャ絨毯。禅寺、古色蒼然、侘び寂びという一般的なコンセプトからは程遠い。

しかし少しく考えてみると、仏教はインドで生まれ、中国からあるいは朝鮮半島なども通じて日本に伝来したもの。禅は梵（ゴータマ）から始まり、南インドの達磨が中国に行き、少林寺での面壁9年で中国禅の開祖となったと言う。臨済を中興として盛んだった南宋に渡った栄西が嗣法の印可を受け、持ち帰ったものが臨在禅。往時としてはハイカラなもので、旧勢力との軋轢・妥協の中での活動だったに違いない。そうすると、大亀禅師も'70年ごろの仏教界にこれまでの枠に囚われない進取のメッセージを込められたのかも知れない。

この春にはインドの数都市も訪問させていただいた。米国留学から帰国したばかりの議員のご息子がナールンダ僧院を知っているか、世界最古の大学だ、日本人も嘗て勉強に来た、との言。玄奘

三蔵が仏典を求めて行ったことしか知らないと答えたが、日本から学ぶべきことは多いが、逆に日本もインドから学ぶべきことはあるはずだと延々と諭され



た。長い歴史観を踏まえた人と人の交流、祖師西来意とまで言わずとも、確かに日々の経済や文化の営みの交流そしてその積み重ねはお互いを豊かにするはずだ。

今年是北京／上海にも何回か足を運んだ。ある研究所の若手が同行者に知日派は年々肩身が狭くなると漏らしていたのが印象的だった。

昨秋東京駅丸の内駅舎が保存復原、カメラを持った人たちが未だ多いと聞く。単に大正ロマンへの懐古ではなく、明日に向かった展開への意志に対する共感なのではないだろうか。明日に向かったのムードが醸成されつつある今、インド・韓国・中国もそれぞれに課題を抱えているとはいえ、いろんな制約が少なくなり、互いの交流が蓄積されていくことを猛暑の中で願うばかりである。